

# tutor.bunko 漢字の部屋

——日本語を身近に感じる語彙教材をめざして——

永 須 実 香

## 【要旨】

日本国内の大学における外国人を対象にした日本語カリキュラムの多くは、日本人の英語学習者が中・高の6年で消化するのと同じくらいかそれ以上の量を、その半分ほどの期間で習得することを求めているように見える。この徹底的に限られた学習時間の中で昨今「語彙学習」は自学自習の範囲とされることが多くなり、漢字・語彙は授業時間から削られる対象の筆頭となった。「tutor.bunko 漢字の部屋」(<http://bunko-kanji.blogspot.com>)は、独学あるいは補習クラスなどで利用できる漢字・語彙教材である。英訳ポップアップ、動画などの学習補助機能がある。例文には、2002年まで上智大学Japanese Language Instituteで行われていた「漢字」の授業の教材、内容、教師としての体験をベースに、読みやすく使いやすいものを集めた。本稿では、前半で学習者の語彙学習の現状と問題点を整理し、後半で、問題点の解決のために「tutor.bunko 漢字の部屋」で目指す「学習者に導入語彙を身近に感じてもらうための例文の工夫」について述べる。

## 1. 日本語学習者の現状

### 1. 1 短い学習時間

皆さんは、日本語を外国語として学ぶ学習者が、どのくらい授業で勉強しているか、ということをお考えになったことがあるだろうか？ 上智大学の場合を例に、いわゆる「中級」の教科書が終了するまでの実際の授業時間を計算してみよう。

上智大学レギュラートラックの場合、JAPN111→112→211→212と進み、中級が終わる。1学期15週間の授業時間数は111と112がそれぞれ105時間（90分

×週5回×15週)、211と212がそれぞれ90時間(90分×4回×15週)だから、4コース(=2年間)の合計は390時間である。上智大学インテンシブトラックの場合は、JAPN180→270→280と進み、中級が終わる。インテンシブの一学期の総授業時間数は、どれも90分×週10回×15週間だから、180、270、280合わせて675時間。しかし、180はゼロスタートのコースではなく、ある程度の経験が必要なので、仮にJAPN111の時間数、105時間を足すと780時間。つまり、ゼロから4学期(=2年間)で780時間である。まとめると、「いわゆる中級」が終了するまでに、上智大学の場合2年間という期間が見込まれており、その総授業時間は、レギュラートラックで390時間、インテンシブコース780時間である。

日本語教師でない方には、この数字が何を意味するかがピンとこないと思うので、実感として理解していただくために、以下、いくつかの例と比較を試みる。

大津(2007)は、「英語学習は母語を身につけると同じ手順で進める」のは現実的ではない、と述べる章の中で、次のような計算を行っている。

母語話者が母語の骨格を構築する三歳までに、母語を耳にしている時間は、(控えめに見積もって)一日10時間×365日×3年間=10950時間であり、これは、「外国語学習者が、毎日3時間ずつ年中無休で勉強を続けて、10年かかる」量である。

上智大学のインテンシブトラックは780時間だから、これは三歳児の14分の1である。仮に授業以外にも日本語に触れることを考慮して二倍にしたとしても「たった3歳の子供の」7分の1に満たない。あるいは、旧日本語能力試験出題基準<sup>①</sup>からの数字であれば、中級が終わった2級で、授業時間は600時間が目安という。これは実に3歳の子供の20分の1でしかない。一方で、盛り込まれている内容とはいうと、文法では、助詞、動詞の活用、自・他動詞、時制、受身、使役、使役受身、仮定形などなど、およそ文法と呼ばれるもののほぼ全てを網羅し、かつ、語彙総数では6000語彙、漢字総数約1000字という量なので

---

(1) 国際交流基金「日本語能力試験 出題基準」凡人社(1994)

ある。

赤ちゃんはその生得的な力で、自然に第一言語を習得していくのにひきかえ、外国人学習者は、母語の「干渉」を乗り越え踏み越え、記憶力も弱くなった成人の脳で、外国語としての日本語を習う。それなら外国人学習者の方が、母語話者よりも学習と習得に時間がかかる、と考えるてもよさそうなものである。

フランス人がスペイン語を習うとか、ドイツ人が英語を習う、もしくは韓国人が日本語をを習うといった、いわゆる「言語間距離」が近い場合、母語は「干渉」でなく「助け」となる。その場合、“外国語”学習に想定される時間は、ずっと短くて済む。しかしながら、例えば欧米人にとって日本語は、文法構造も文化背景も全く異なる外国語（いわゆる言語間距離の遠い外国語）であるから、相当の覚悟をしなければならない。この場合の習得時間は、言語間距離が近い場合の2.2倍である、というデータもある。(Odlin, 1989)

例えば、言語間距離の遠い外国語学習の例として、一番身近なのは、日本人の英語学習である。私たち日本人がどんなカリキュラムの中で、言語間距離の遠い言語「英語」を学んできたか、それと比べると、同じ境遇にある非漢字圏日本語学習者の苦勞がより一層よく分かっていただけと思う。

量的なデータとして、中学～高校三年まで六年間の英語の授業は合計840時間という試算がある（杉浦：2000）。質的にはいわゆる「文法」が全て網羅されている。語彙数は、どのくらいかという、中学三年間で1200語（平成19年までは900語）<sup>(2)</sup>である。高校まで含めた文部科学省による、規定や制約というもの存在しないので、個人的によく知る英語教師の友人二人に、大まかな目安となる数字を尋ねたところ、大学入試に必要な語彙数は、センター入試で3000語、東大、京大といった超一流校を目指すレベルで6000語と言われているようだ。

中・高6年間分の授業時間数は、表向き840時間だが、受験生が授業時間以外に英語にかけている時間が尋常なものでないことは日本人なら誰もが知っている。彼らは、中学以前から始めているし、塾にも通い、家庭教師もいる。更

---

(2) 文部科学省「中学校学習指導要領解説 外国語編」開隆堂出版（2002）

に、ラジオ講座、テレビ放送、参考書、訳や解説の付いた小説、映画の脚本が本屋にあふれ、音声、動画、その他ありとあらゆる教材があふれているという環境のもとでの「6年間840時間」である。

非漢字圏日本語学習者が、「2年間780時間で、初・中級文法と6000語を学ぶ」といった時、そのカリキュラムがいかに過酷であるか、が理解していただけると思う。

## 1. 2 「短時間習得への期待」が招く悲劇

過酷なカリキュラムは、具体的に、どんな問題をひき起こすか。ここでは、体系的な問題である「クラス構成」と学習者内部の問題「語彙習得」の二つの問題について、とりあげる。

### 1. 2. 1 「クラス構成」の問題

日本語学習のカリキュラムの最初の2年ないし3年は、日本人の中・高生の英語6年分に匹敵する。ということは、つまり中1と中2が、ともすると中3が、同じクラスに座って、同じクイズ、同じ試験を受けるという事態が起り得るということである。

スタート地点でこれほど異なる学習者をひとまとめに括っていることには、当然、無理がある。教師は、クラスの間層を照準にして、授業を進めようとするだろうが、簡単に分かる人、全く分からない人が混ざっている。何も手だてを取らなければ、トップクラスの学生達は伸び悩み、底辺の学生達はいつも不安を抱え緊張し、どちらも学習を楽しめない。教師のストレスも大きい。

できる学生とできない学生の混在については、そのほうが刺激し合って伸びる、という利点がよく説かれるが、利益と不利益両方を詳細に検討してみたならば、不利益の方が大きくなる可能性も大いにあるのではないかと。

特に、評価に関しては、深刻な問題だ。スタートラインで明らかに実力が違う学生を同列に並べているのだから、真面目に「フェア」な評価に取り組もうとすればする程、「アンフェア」な評価結果を生むことになる。もっと余裕のあるカリキュラムに全体が変わることが理想だが、それができないのなら、「評

価」に際して、学生のバックグラウンドに応じた配慮を怠るべきではないだろう。

更に、当の学習者本人達の気持ちへのケアが重要になる。学生は、教師のように俯瞰的に「カリキュラムの過酷さ」を知ることはできない。そのような状況で、教師の方だけが「事態」を把握し、「配慮」しているだけではだめだ。それが学習者たちに伝わらなければ、授業中の不安を取り除くことはできない。学習者が、劣等感や不安を抱えて、学習を楽しめるはずはないのである。夢と理想に燃えて来日したが、たまたまプレイスされたクラスでは底辺で、学ぶことを少しも楽しめず、自分の能力や日本語そのものに絶望して、ドロップアウトする、というケースは実際に起こっている。日本語教育が国際交流の一貫であることを考えると、一例も出てはならない「犠牲」だと思われる。このような犠牲者を救うことができるのは、現在のところ、現場の教師だけのようだ。一介の教師には、カリキュラムを変えるだけの政治的力はない。簡単に事態は変えられない。しかし少なくとも「成績が上がらないのはあなたの能力の問題だけではない、日本語のカリキュラムが過酷なのである」と知らせ、学習者が自信喪失に陥らないよう精神的なケアをすることはできる。それが学習の伴走者としての教師の役割だと強く思う。

### 1. 2. 2 「パズル読み」の問題

学習時間の想定が短いことに、一番被害を受けているのは、その習得に一番時間を食う漢字や語彙である。「会話」に比べて、「一人のできる」学習内容とされ、授業時間から削られて行く傾向にある。これまでの外国語教授法の流れの中で、語彙の問題が長くなおざりにされてきてしまっていることを、門田(2003)は次のように述べている。

... 以上のような文法重視の見方に対し、実際の言語運用 (linguistic performance) においては、文法能力、すなわち言語能力 (linguistic competence) よりも、もっと総合的なコミュニケーション能力 (communicative competence) が重要であると考えられる研究者もいる。しかし、そのような研究者にしても、ことばの使用における語用論的能力 (prag-

matic competence)、社会言語学的能力 (sociolinguistic competence)、方略的能力 (strategic competence) の重要性を説き、さらにことばを理解したり生成したりする際のスキーマ・スクリプト (schema or script) など各種背景知識 (background information) を駆使したトップダウン処理 (top-down processing) の役割には注目するものの、そのトップダウンが可能になる前提として不可欠な、語彙情報やその運用を中心とするボトムアップ処理 (bottom-up processing) の重要性にはほとんど着目を払ってこなかった。

総学習時間が短い上に、重要性が認識されていないから、語彙学習は授業に入り込めない。現実には習得しなければならないたくさんの語彙が存在する。意味をとらえ、覚えて、定着するには時間がかかるはずなのに、かけるべき時間をかけられないから、学習者は困り果てる。この点で教師を恨む者さえ出てくる現実がある。

その学習者の困りようの一例を、一人の学生の言葉を借りて、紹介する。彼女は、プレイメントテストで、中級後半のクラスに入った。クラス全体から見ると、下の方で、漢字力が弱かったが、「頑張る」ということであつた。その彼女が、学期半ば、私の研究室を訪れて、次のように嘆いたのである。

「先生、毎日、日本語の勉強が辛くて仕方ありません。特に、読解です。語彙について、渡されるのは、英訳のリストだけ。これを使って、日本語の単語をパズルみたいに英語に入れ換えて、そこから意味を推測しています。毎日『読んでいる』とされてしまうけれど、私には、日本語を読んでいるとは感じられないんです。こんな読み方だったら、全く習ったことがないアラビア語でもラテン語でも、辞書をひいて、単語を並べて、類推して『読んでいる』のと同じレベルです。日本語を自分の力で読んでいる、という実感が全然ありません」(原文は英語、筆者が和訳)

彼女は、もともと語彙力が弱かった。学期半ばにさしかかると読解文に出て来る語彙は新出のものばかりになってきていた。だから、渡される単語リストに頼りきり、それをパズルのように組み合わせて、意味を推測して理解しようとしていた<sup>(3)…次頁参照</sup>。「こんな読み方なら、全く習ったことがない外国語でもで

きる」という表現は、その時の彼女の苛立ち、やってもやっても報われないという虚無感を非常にうまく、伝えてくれている。

独力で「すらすら」とは言わずとも、辞書を使って「たどたどしく」でも、ある程度「読んでいる」実感を得る「レベル」というのがある。適切なレベルを読んで、初めて「学習」が成立する。「パズル読み」では、そもそも学習が成立しないのである。パズル読みの授業は、学びたいと思っている学習者にとって、限りなく無意味で腹立たしい時間になる。しかし、教師がこの「苛立ち」に気づいていないことが意外に多いのではないかと。「読めない」のは「勉強が足りないから」と簡単に判断してしまうことがあるのではないかと。そうではなく、語彙力不足が原因のパズル読みが進行していないかどうか、その兆候を教師が気をつけて観察する必要がある。

クラスの一定数以上の学生にとって、語彙が難し過ぎる文を読まなければならないような状況に陥ってしまった時はどうするか。(読解文のレベルを下げるのももちろん選択肢の第一であるが、教科書を変えられないなど、あらゆる手段を講じて、こういう事態が起こるのが現実だ。) そんな時、唯一の解決策は、語彙についての理解を深める時間を割くことだろう。読む前に、新出の語彙を一緒に学習する時間を設けて、語彙を身近に感じてもらう機会を作る。解決策として万全ではないが、学習者の苛立ちを解消する手だてはほかはないように思う。しかし、前述したように、授業時間を語彙に割くべきだ、という考え方は、現在あまり受け入れてもらえないのが実情なのである。

「パズル読み」をせざるを得ない学習者を生む原因は、学習者が語彙力に合ったクラスに入っていないこと、語彙を手当てする時間が授業中に割られないこと、この二つだ。しかし、この二点は、「カリキュラム」と「教授法」に起因する根の深い問題だから、容易には解決できそうにない。

---

(3) このような読み方を森川 (甲南大学) と筆者で「パズル読み」と呼ぶことにした。本稿でも以後、そう呼ぶ。

## 2. 「tutor.bunko 漢字の部屋」

### 2. 1 その構想の概略

語彙力が学習者にとって大きな問題であるにも関わらず、その学習を独学に任せるなら、そのために利用できる教材が提供されなければならないと考えて、2009年6月にインターネット上へ「tutor.bunko 漢字の部屋」の公開を開始した。

インターネット上に教材があれば、無料で好きな時間に好きなだけ利用できる。知らない漢字をグーグル検索して調べることができるので、どんな読解教材にも対応できる<sup>(4)</sup>。漢字の字義説明は英語でされており、例文は、学習者が知っているはずの語、文法に配慮されているので、調べた漢字の説明に分からない言葉があっても辞書をひく、ということが少ない。仮に分からない言葉があった場合は、下にある白文の上でカーソルを動かせば、ポップアップウィンドウに英訳が出る。日本人の生活に身近な画像、歌やテレビコマーシャルなどもリンクがあり、クリック一つですぐに見られる。市販の教科書などでは、企業名、商品名などの固有名詞はなかなか使用できないが、ネット教材なら問題ない。古くなれば、手軽に情報交換、改訂することができるというのも大きな利点だ。

学生が辞書代わりに自宅学習に利用することもできるし、教師が少し手伝って、自分のブログを作り、そこに単漢字ページのリンクを好きな順に貼りつければ、使用教材用にカスタマイズしたオンライン教材を作ることも可能だ。コピー&ペーストで、印刷媒体の教材を作成することももちろん可能である。

作成者である筆者が一番おすすめしたいのは、クラスもしくはグループによる学習である。なぜなら、この教材は、以前実際に行われていた授業をペースに作成されていて、読み、話し、聞きたくなるような例文も多く揃えてあるからだ。

---

(4) ただレグーグル検索するにはその漢字を打ち込まなければならないので、「読み方」の一つは知っていることが必要。



ベースにした授業というのは、2002年まで上智大学に存在していたJapanese Language Institute (通称JLI)<sup>(5)</sup>の漢字の授業である。使用されていた教科書は、「Gateway to the Japanese Written World」のunit 1とunit 2で、全925字を網羅。「漢字の部屋」の漢字の配列、字義は、この教科書のもをそのまま踏襲させていただいた。

「漢字の部屋」の例文には、大きく二つあって、「Gateway to the Japanese Written World」にあったもの(複数の教師による共作)と、筆者が独自に加えたもの(詳細は後述)である。筆者が加えたものの多くは、この教科書を使用した授業の中で、学習対象語彙を使って、学生達と話した内容を例文の形にした(もしくは作成中の)ものである。だから、読みながら隣の人に問いかけ、自分の考えを言い、すぐに使うことができる。初級なら初級の、中級なら中級のレベルに合わせたシンプルなものであるから、楽しみながら考え、語り、聞き、時に笑い、語彙をより身近に感じられるようになる。

たった一度でも二度でも、自分の口から日本語の文として語彙を使う、そういう作業を経た後に、また読み物に戻って「読む」という手順を踏めば、紙の上に書かれてある語彙、少し前まで知らなかった言葉に、少し深みが出、時には色や匂いがついていることだろう。英訳を並べて、パズルのように「読んで」いるのとは違う空気を感じながら、日本語を「読む」ことができるはずなのである。それらの成功体験の中で、学習のコツを身につけていって欲しい。

語彙の英訳を覚えるだけでは「パズル読み」を防げない。その語彙の日本語としての意味、使用法に少しでも近づいて、語彙を感じる、使ってみることが必要である。読みながら、語彙の日本語体験ができる、そういう例文が「tutor.bunko 漢字の部屋」の語彙教材としての、いわば売りである。以下、その点について詳述する。

---

(5) 終戦後間もない1949年にイエズス会が横須賀市田浦に設けた外国人会員のための日本語学校がルーツ。1978年に上智大学比較文化学部(市ヶ谷キャンパス)に移り2002年にその幕を閉じた。筆者は1992年より10年間所属。

## &lt;tutor.bunko 漢字の部屋&gt;より「白」の例

読者になる 共有 不正行為を報告 不正行為を報告 次へ戻る

## tutor.bunko 漢字の部屋

ホーム 初めての方へhow to use Welcome to Kanji world Gateway Kanji List List for Basic Kanji Users  
special thanks 読み物

★漢字を検索したい場合(例えば「漢」なら) <http://google.co.jp/>で「site:bunko-kanji.blogspot.com 漢」と検索してください。  
If you want to "search" one particular Kanji, for example, go to <http://google.co.jp/> and type "site:bunko-kanji.blogspot.com 漢" in the box and search it.  
★右下「テーブル」の漢字リストから、勉強したいグループを選んで、クリックしてください。↓↓ ↓ ↓  
Click the kanji or hiragana group you want to learn below.

(back to tutor.bunko home-- <http://hasil.is.kanuu-u.ac.jp/tutor/bunko/>)

### 白 106

<div style="font-size: 2em; font-weight: bold;">白</div>	<p>The sound segment is split with the line. Limited only. The  <small>白</small> <small>White</small> <small>White</small>  <small>しろ</small> <small>しろ</small> <small>しろ</small>  <small>しろ</small> <small>しろ</small> <small>しろ</small></p>
---	--

1. けさ 太郎さん の ところ から 小包 が きました。とても 面白い もの が 入って いましたよ。
2. けいじ「あの 女 は、白 だ な」。
3. みそ に も 色 が しるい が あります。大きく おけて 白みそ と 赤みそ が あります。
4. 白ワインと 赤ワインと どちらが すきですか。
5. (you)さんは、白い シャツを たくさん もっていますか。
6. (your friend)さんは、白い シャツが にえています か。
7. こども の とき、うち に 白い いぬ が いました。いぬ の なまえ は、白 でした。

語外 白菜(はくさい) は、すきですか? おいしいですよ。  
<http://www.kikkoman.co.jp/homecook/series/hakusai02.html>

1. けさ 買った の ところ から こづみ が 買ましたとても おもしろい もの が 入って いましたよ。
2. けいじ「あの 娘 さん は、しろ だ な」。
3. みそ に も いろ しい りるい が あります。おろしく けて しるみそ と 赤みそ が あります。
4. しるわいんと 赤わいんと どちらが すきですか。
5. (you)さんは、しろい しつを たくさん もっています か。
6. (your friend)さんは、しろい しつが にえています か。
7. こども の とき、うち に しろい いぬ が いました。いぬ の なまえ は、しろ でした。

Google で 漢字 を 探す

**UNDER CONSTRUCTION FROM 414**

414以降は、ただいま作成中です。すみませんが、今しばらく、お待ちください。

テーブル

- 00-00あいうえおあな
- 00-00アウエオ
- 00-00一十百千
- 00-00天子女母父
- 00-00天立日見月心
- 00-14土是止正出形走業
- 00-22火光日早夕雨赤
- 00-30川田谷行田上行
- 00-38糸竹草米糸羽肉
- 00-46犬牛馬鳥魚虫内
- 00-54九十百千万四九
- 00-70上下中内外小多少
- 00-78東西南北
- 00-80部首前形
- 00-87王上使元先夫央
- 00-95交交交始夫妻聖毎
- 103身包包白赤黒黄青
- 111年才木未木竹筒干
- 119去去今令合全至工
- 127力力力力力力力力
- 135赤毛黒黒黒黒黒黒
- 143丁市町区曲内内内
- 151声鼻原穴門戸高立
- 159声鼻原門鼻鼻不術
- 167身体井田代
- 172化(伴)化(大)火(火)食(食)
- 181土(土)土(土)土(土)土(土)
- 188字(字)字(字)字(字)字(字)
- 195名(名)名(名)名(名)名(名)
- 204音(音)音(音)音(音)音(音)
- 211までの漢解Readings
- 218打(打)有(有)有(有)有(有)
- 220寸(寸)寸(寸)寸(寸)寸(寸)
- 228物(物)者(者)目(目)目(目)
- 236表(表)初(初)半(半)等(等)
- 244和(和)春(春)古(古)知(知)
- 252松(松)橋(橋)花(花)赤(赤)
- 260近(近)遠(遠)定(定)海(海)
- 268前(前)後(後)授(授)管(管)
- 276前(前)後(後)授(授)管(管)

**0 コメント:**

## 2. 2 具体的な方法

野呂 (2003) は、意図的語彙学習で効果のある方法、原理として、次の6点を挙げた。すなわち、(1) 自動的に意味を認知できる語を増やす、(2) よく知っている語と新しい語を組み合わせる、(3) 単語に出会う機会を多くする、(4) 深い処理を促進する、(5) 語の意味をイメージ化・具体化する、(6) 様々な教授法を使う、である。以下(1)～(4)に沿って、筆者の語彙学習に関する考え方と、「tutor.bunko 漢字の部屋」の例文の具体的な取り組みを紹介する。

### 1) 自動的に意味を認知できる語を増やす

新語について、「自動的に」意味を認知できるレベルに到達するには、話す、聞く、読む、書く、を通じて、学習者が多くの日本語体験を積み重ねなければならない。その体験の前提として必要となる基礎力をつけようというのが「tutor.bunko 漢字の部屋」の目的である。

野呂は前掲の稿の中で、その数について、「ワードファミリーで数えて、高頻度の2000語とAcademic Word Listを含めた5000語以上知っていることが望ましい」とまとめている。「tutor.bunko 漢字の部屋」で、扱おうとしている漢字数は925字である。日本人の子供が小学校で習う教育漢字は1006字であるから、その9割余りをカバーする。そして1字ずつその字の意味の広がり膨らませていく学習方法を取っているから、「ワードファミリー」を少しずつ増やしていける。

この「ワードファミリー」的に語彙をビルドアップできるのは、漢字あるからこそ、である。外国語としての日本語がどのような言葉のネットワークを持つのか、それを学習者の母語と比べながら積み上げていくことができる。そして、漢字の数は習得した語彙数の指標にもなる。

### 2) よく知っている語と新しい語を組み合わせる

「tutor.bunko 漢字の部屋」では、既知語、既習文法の数が非常に限定されている初中級の学習者のために、既知と想定される語彙や文法の中から選んで、教師が例文を作っている。だから、学習者は、一人でも学習が無理なく進められる。

日本語を、学習者との関係でみた場合、いくつかの種類、段階がある。それは、(1) 学習者同士で使用する(できる)既習の日本語、(2) 日本人(主に教師)が学習者に対して使用する日本語、(3) 日本人同士が使用する日本語、(4) 日本人が頭の中で使用する(=学習者に最後まで見えない)日本語などだ。それぞれ、分かりやすい例をあげると、(1) はクラスメートと使う日本語がそうだし、(2) は書かれたものとしては日本語の教科書にあるもの、話されるものとしては教師や彼らと話し慣れた身近な日本人の使うもの、(3) は日本人対象の全ての日本語、書かれたもの、話されたもの、いわゆる生の日本語である。(4) は、日本人の思考言語だから、習得がかなりの段階に至るまで見えてこない。学習者が接するには、上級に行って、ある種の文学作品(映画なども含めて)に触れる必要がある。学習者にとって(4)のタイプの日本語が自然に使えるということが最も難しいレベルの目標になるだろう。それは、日本人の思考が分かった上で、同じような思考が日本語で可能になるということだから。つまり、それまでの階段をどう登るかが、学習の過程ということになる。

「Gateway to the Japanese Written World」に掲載されていた複数教師共作による例文には、(2)と(3)が多かった。筆者は(1)のタイプの例文を補足的に用意して授業に臨み、学習者同士で実際に使ってみてもらうという活動をしていた。今回、独習も可能な教材として、「tutor.bunko 漢字の部屋」を公開するにあたり、クラス活動で補足した例文を加えた。

また、同じく、筆者の授業の経験から、紹介すると学習者が非常に喜ぶタイプの文がある。それは(5)簡単な語彙が組み合わせられた慣用表現で、たとえば「耳が痛い」「お尻が青い」「顔が広い」などである。学習者にとっては、日本語らしい表現に出会うための例文とも言える種類のもので、今回それも意識的に加えていくことにした。(後述)

### 3) 単語に出会う機会を多くする

例文を意図的に作っているから、ある程度「くり返し」をコントロールすることができる。新しく導入された語は、その近辺の例文に、何度か登場させるように仕組まれてある。大事なことは、「忘れるというのは完全に覚えるため

の過程だ」という考え方とその実践である。

このくり返し作業は授業でやると更に効果的であった。JLIの漢字の授業では、例文の素読をクラスでしていたが、一人ずつ当てられた学生が例文を読んでいくうちに、少し前に習った語彙が出て来る。あてられた学生が忘れていた時、周りの学生は彼が思い出すまで待っていて、思い出せなければ、助け舟を出す。教わった学生は、友達に助けられたという経験も含めて、その語彙を更に深く記憶に残すのである。そういう日々の体験を通して、習った語彙を「忘れる」ということは、どの学生にも起こり、覚える過程で必要なことだと極めて自然に感じられるようになる。一緒に学ぶ者同士の化学反応的な、精神面でのプラスの影響力を、漢字の例文を読むクラスは持っていた。これは決して小さなことではないと思われる。忍耐力の必要な漢字や語彙の習得の過程を、授業でクラスメートとシェアするというのも、学習者に大きな利益をもたらし得ると私は確信している。このようなことから、「tutor.bunko 漢字の部屋」の例文を、定期的に友人と一緒に読み進む場を設けていただけたら理想的だと考える。

#### 4) 深い処理を促進する

処理水準が深ければ、記憶に残りやすいというのは、外国語学習に限らず、常識の範囲でよく理解できることであるが、具体的にどのように「深い処理」を促すのが外国語の教師の課題である。

「tutor.bunko 漢字の部屋」では、例文を提供し、その中で学習者自身の経験や嗜好を尋ねるという方法をとる。自分に経験があればそれを思い出すことで、なければクラスメートの経験を聞くことで、その語彙を自分や身近な人物とともに色づけし、記憶に残すためである。以下に「白」を例にして、例文作成パターンをいくつか紹介する。

##### ① 食べ物・飲み物に関する質問

例文:あなたは、白ワインが好きですか。赤ワインが好きですか。

例文:おすしは、好きですか。白身の魚と赤身の魚とどっちが好きですか。

例えば「白身の魚には、白ワインが合います」という例文もあるけれど、ここには、学習者の関わり(=自己関与)がない。学習者の気持ちが、話したい、

聞きたいという方向に動かない。

食べ物／飲み物は、学習者が好きな話題である。一人で例文を読んでいても、聞かれたら、話したいことが頭にすぐ浮かんでくるだろうし、日本人ともよくする話題の一つであろう。話したい相手もいつも想定しながら読んでほしい。ごくシンプルな文法と語彙を使った文でも、身近な人のいろいろな側面を知る質問は可能だということも、体験してほしい。

## ② 動物に関する質問

例文：子どものころ、私の家に、白い犬がいました。名前は、白でした。犬が好きですか？ 白い犬をかったことがありますか？

動物も一般に学生たちの好む話題である。この例文では、第一文に、書き手の思い出を書き、第二文以下で、同様の経験、趣味を持つかどうか、学習者に問いかける。「白い犬」のイメージ、体験を想起させようとする質問である。もしクラスだったら、「白い犬ではなくて、白いねこはどうですか」とか「白い鳥は？」など、学習者の知っている動物の名前と組み合わせ、話を発展させていける。

## ③ 持ち物に関する質問

例文：白い服を持っていますか。たくさん、持っていますか。白いくつは？

持ち物は個性を表すアイテムだから、質問の答えが「はい」でも「いいえ」でも、その人の「個性」が出る。例えば、白いシャツというのは、汚れるから面倒臭がりには扱いきれない。もし、白いシャツを毎日着こなしている男の学生がいたら、皆で、なぜかを考えてみる。性格なのか、経済力か、恋人の存在かと話を展開させて、「白いシャツ」とその場にいる人物を結びつける話題を提供する。

## ④ 知人の名前を利用する

例文：(use your friend's name) さんには、白いシャツと、黒のシャツと、どちらが似合うでしょうか。なぜ、そう思いますか。

意図するところは、③と同じである。導入語彙と人物を関わらせて使おうとするものである。クラスであれば、クラスメートのイメージを共有するのが楽しい。姿形、雰囲気を考えながら、白か黒か、選択して、答えを出す。「白」の

イメージを皆で話すことができるだろう。

⑤ めずらしい体験を聞く

例文：あなたは、白いドレスを着たことがありますか。

周囲の人が「へえ」と言うような経験、それを話した結果として、話した人物の個性が強く出るような質問をする。

クラスだったら、まず男の学生に聞き、クラスに小さな笑いを起こす。これも一つの「体験」例文となり得ると思う。文の意味を理解し、その場で、笑いという感情を共有するのであるから。次に、女性に聞く。「白いドレス」には、ウェディングドレスの意味もあるから、もしまだなら、夢を持つか、そうでないか、など、白いドレスに対して持つ意見、感情を尋ねる。

⑥ 日本と母国を比較する

例文：日本のお医者さんは、白衣を着ます。あなたの国でも、そうですか。

「お医者さんは、白衣を着ます」だけでも、例文としては成立するが、「あなたの国でもそうですか」と加える。それまでは、ごく当たり前の事実でも、異文化においては当たり前でないこともある。いきなり「日本文化とは何か」と大上段に構えるより先に、生活の些細なことごとから積み重ねて考える訓練をし、比較文化的な視点と態度を養おうとするものである。

以上、例として、五つの例文作成パターンを具体的に示した。ここで言い添えておきたいのは、これらの文が自分も含め「人を知る」ことにつながる文だということである。身近な人をいろいろな視点で観察したり語ったりする力、意外な側面を発見する体験の数々は、将来誰と接する時にも役立つ財産となるだろう。できれば複数で読み進めてもらいたいが、一人であっても頭の中で話し相手を想定して読んでほしい。その場を共有する人々についての発見あり、笑いあり、まだ日本語の流暢でない初・中級の学習者に、楽しく、たっぷり日本語に浸る時間を提供できるのではないかと思う。

## 2. 2. 1 「分かる」体験ができる表現を紹介する

私が授業中に紹介すると、学習者の目の色が変わるタイプの表現がある。それは、簡単な語意を組み合わせる新しい意味を生じるタイプ、例えば「お尻が

青い」「水と油」「白黒はっきりしよう」というような、ごく日本語らしい慣用表現の類である。

小野・小林・長谷川（2009）は、「初・中級で学ぶ動詞、形容詞、名詞を使った表現を集め」て、「日常的によく使う表現」を「効率的に」学ぶことを目的として作られた教材である。三十の漢字がとり挙げられている。それぞれの基本義、意味の拡張の点から基本義をつなげる問題、活用や助詞も考えて空欄を埋める例文形式の練習問題、確認の選択問題、新聞、小説レベルの少し高度な例文を読む練習などから構成されている。

例えば、7番目に登場する「耳」の基本義は、A：聞くために使う器官、B：聞いたり聞こえたりすること、C：聞き分ける能力、D：物の縁、である。続いて、「耳を澄ます」、「耳が痛い」、「耳を養う」、「パンの耳」などを紹介しながら、これらが基本義A～Dのどれに当たるか、考えさせる。「意味を拡張させて基本義をつなげる」作業だ。

このように、漢字をキューにして、語彙を増やし、その語の意味の世界に深く分け入っていくやりかたは、ワードファミリーとして語彙数を増やしていけると同時に、質的にも知的作業として非常に興味深いものだと思う。「耳=ear」「痛い=to hurt」だが、「耳が痛いアドバイス」と言えば、物理的な痛みではなく、心理的な不快を表すことになる。このような意味の拡張を知るプロセスは、学生にとって、とてもエキサイティングなものようだ。漢字のクラスで、これをやると、学生達は、間違いなく非常に喜ぶ。眠そうだった学生も、目がキラキラしてくる。察するに、母語にはそのような表現がなく、直訳はできない、日本語の世界にしかない表現を見つけた！という気持ちができるのだろう。

「耳」は分かる。「痛い」も分かる。次に「耳が痛いアドバイス」と聞くと、彼らの顔は一瞬戸惑い、少し考えて「あ～～」と合点し、文字通り、目を輝かせ、笑顔になる。彼らの頭の中で、全く新しい「表現」と「意味」が出合っている。日本語にじかに触れている感触を楽しんでいるように見える。最も大事な点は、日本語を感じているという「感覚」が、学習者の手の中で直に生まれることだろう。これは、一種の知的快感と言っていいと思う。

こんなに面白い体験を、早い段階から学生にさせない手はないと私は思うの



だ。中上級まで待つのはあまりにもったいない。初期の段階から、母語と日本語の差を少しずつ意識し、理解していく過程を経ることで、日本語の「勘」が養えるだろう。

上述した例文に関する考え方は、「tutor.bunko 漢字の部屋」の開発、作成の作業を通じて、筆者の中でよりいっそう明確にすることができたものである。今後も、これらを基盤にして、よりよい例文の作成に向け、模索を続けていくつもりだ。

### 3. まとめと今後の課題

語学を学ぶ者にとって、語彙力は、いわば基礎体力である。基礎体力のない者が高い山に登ったり、自分の実力以上のゲレンデに飛び出して行けば、スポーツなら命に関わる危険も伴う。だから、本人も周囲の者も注意を怠らない。しかし、語学のゲレンデ(=クラス)の中では命の危険にさらされることはない。学習者がどんなかっこうで日本語の文の上を進んでいるのか、教師はおろか学習者本人にさえ、その「危うさ=分からなさ」が分からないこともある。だから、犠牲者を出さないためには、伴走者としての教師の、経験からくる察知力と配慮が必要だ。

「基礎体力が必要だ」と認識した(している)学習者には、そのトレーニングを手軽に無理なく継続できる手段、それぞれの身の丈に合った教材が必要だ。いつからでも始められ、どこからでもアクセスでき、好きな時に好きなだけ、学習できるトレーニングルームとして、「tutor.bunko 漢字の部屋」の完成に向けて、作成を継続、提供し続けたい。学習者に、日々のトレーニングを通して、日本語「一語」の色や匂いを身近に感じてもらうことを目標にする。その色や匂いがつながって、日本語のネットワークが洋々と広がっているのだ、ということが少しずつ感じられていけば、それこそが上級への扉の鍵だと信じる。

最後に、「tutor.bunko 漢字の部屋」は、同じ「伴走者」として日々汗を流しておられる先生方にも、身近にアクセスしやすい「部屋」を目指しています。

ご意見、ご要望をお聞かせ願えれば、嬉しく思います。

### <謝辞>

「tutor.bunko 漢字の部屋」を作成するにあたり、著書「Gateway to the Japanese Written World」を快く提供して下さった新美和昭先生、山浦洋一先生のご協力と長年のご指導なしには実現しませんでした。深く感謝申し上げます。ありがとうございました。また本研究の一部は甲南大学総合研究所および23年度科研費(21320095)の支援を受けて行われました。機会を与えていただいたことに感謝いたします。最後に、e-chutaの細かな作業を手伝って下さった小林謙太郎さん(甲南大学知能情報学部)、漢字の書き順ムービーを実に根気よく作成して下さった寺田明日香さん(甲南大学知能情報学部)、ご協力ありがとうございました。

### 参考文献

- 大津由紀雄(2007)「英語学習7つの誤解」NHK出版
- 小野正樹・小林典子・長谷川守寿(2009)「コロケーションで増やす表現」くろしお出版
- 門田修平(2003)「メンタルレキシコンとは何か」, 門田修平編『英語のメンタルレキシコン: 語彙の獲得・処理・学習』の第1章, 松柏社(2003)
- 杉浦正好(2000)「なぜ8年も英語を勉強してもできるようにならないか」『名古屋大学言語文化だより』2000年10月1日号
- 新美和昭・山浦洋一(1985)「Gateway to the Japanese Written World unit 1 & unit 2」上智大学(市販はされていない)
- 野呂忠司(2003)「外国語の語彙学習と指導法」, 門田修平編『英語のメンタルレキシコン: 語彙の獲得・処理・学習』の第13章, 松柏社(2003)
- Odlin, T (1989) *Language Transfer: Cross linguistic Influence in Language Learning*. Cambridge University Press

## tutor.bunko The Room of Kanji

—Teaching materials that learners can relate to

and have easy access—

For Japanese learners, it is very difficult to memorize large amount of kanji characters, vocabulary and variety of expressions. Especially for learners from countries that do not use kanji characters, kanji learning is a severe burden on their memory. Kanji and vocabulary learning should be instructed by teachers in Japanese classes, but it is in reality impossible to learn kanji in the classrooms because of shortage of school classes.

In order to compensate this present problem, we are making the site named 「tutor.bunko 漢字の部屋 the Room of Kanji」 (<http://bunko-kanji.blogspot.com>). The content of this site is based on a textbook named “Gateway to Japanese Written World”, which was used in Japanese language classes at “Japanese Language Institute of Sophia University” until 2002. The examples are designed for learners to read, understand and use easily so that they can “feel” the newly introduced vocabulary close to them.

In first half of this paper, I will show the present situation and problems which Japanese learners are facing. Then in the second half, I will show some unique ideas of making the site, especially its examples, and how useful the site is for self-studying or catching up with class lessons.